

Title	<書評> Nikolas Rose, "The Politics of Life Itself", Princeton University Press
Author(s)	齋藤, 悠士
Citation	年報人間科学. 31 P.113-P.118
Issue Date	2010
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/11463">https://doi.org/10.18910/11463</a>
DOI	10.18910/11463
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

Nikolas Rose  
*The Politics of Life Itself*  
Princeton University Press

齋藤 悠士

はじめに

本書『生それ自身の政治学』は二〇〇七年に Princeton University Press より、IN-FORMATION Series の一冊として出版された。IN-FORMATION Series の編集を務めるポール・ラビノウはミシェル・フーコーをアメリカに紹介した主要な一人であり、ヒューバート・ドレイファスとの共著『ミシェル・フーコー——構造主義と解釈学を超えて』（筑摩書房、一九九六年）などフーコーに関する数多くの書物を著している。その中でも *The Essential Foucault* (The New Press, 2003) をラビノウとともに編集したが、本書の著者であるニコラス・ローズである。

ニコラス・ローズは一九四七年にイギリスのロンドンに生まれ、ゴードスミス・カレッジの社会学部教授を経て、現在はロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの社会学部教授として教鞭を執っている。とりわけフーコーの「生政治学」や「統治性」などの概念の研究によって広く知られており、また同大学内に設置された BIOS (生命科学、生物医学、バイオテクノロジー、社会学研究センター) の所長も兼任している。二〇〇三年に設立されたこの研究所は、「生物医学、バイオテクノロジーが我々の世界、生、我々自身を変えていく」との宣言のもとに、新たな生殖技術やゲノミクスなどを社会的な観点から分析している。この BIOS での研究が本書の核となったことが謝辞にて語られており、同僚の著作から多くの引用がなされている(サラ・フランクリンなど)。ローズの本書以外の主な著作として *Governing the present: administering economic, social and personal life* (with Peter Miller, Polity Press, 2008) *Powers of freedom: reframing political thought* (Cambridge University Press,

1999)などがある。

## 本書の構成

本書の目的は、フーコーの提示した生政治学という概念を、分子生物学や生物医学の発達とそれに応じた諸変化を通じて分析することにある。まず各章の構成について概観しておこう。第一章「二世紀における生政治学」では、後に述べることになる、現代の分子生物学や生物医学の発達と関連して生じた主要な変化について分析がなされている。第二章「政治と生」では本書の題名にある「政治」と「生」について、ジョルジュ・カンギレムやフーコーの著作をもとに解釈を加えている。第三章「生の新たな形式？」は、後述する「最適化」という変化の分析を行っている。第四章「遺伝子リスク」では遺伝子によって主体化される自己と、それによって引き起こされる様々なリスクについて論じられている。第五章「生物学的シチズンシップ」では、社会における個々人の結びつきや国家と市民の関係が、公共の価値(Public value)から生命価値(Biovalue)を巡って再編成されてきていることが論じられる。第六章「ゲノム医学の時代における人種」では、ゲノム医学において変容する人種と民族の観念について考察されている。第七章「神経化学的自己」では、欲望、気分など本来精神に属するものが、身体に属する脳への神経化学的なアプローチによって変化させられること、そしてそれが自己の意味を変容させていくことが論じられる。第八章「管理の生物学」では犯罪の抑止のために管理を試みる分子生物学、神経化学、行動遺伝学が描かれる。本書は以上のように構成されているが、ここではその全てについて詳

述することはできない。そのため、第一章において提示される変化、すなわち「分子化」「最適化」「主体化」「生命の資本化」について見ていくことにする。これらの変化は後の各章における分析の基盤となるものであり、この変化を見ることによって本書の全体像をつかむことができるように思われるからである。

## 分子化

ローズは分子化を説明するために分子的身体(molecular body)という用語を使用する。これと対比させられるものはモルの身体(molar body)である。モルの身体とは、見たり触れたりすることができる最も一般的な意味での身体のことであり、医療の現場における触診、診断、治療や死後解剖など、臨床医学の視線にさらされるのもこの身体である。それゆえにモルの身体がいまだに我々の思考の中心に据えられていることに疑いの余地はない。しかし、二〇世紀の後半におけるテクノロジーの革新において、分子的身体が登場する。この身体は我々の身体に対する考えをまったく新しいものにしてしまうことはないが、少なくともそれを補うかたちで現れるのだ。分子的身体とは、身体の分子化であり、人間の身体を分子レベルで把握することである。近年の生物医学に見られるように、対象となる病原の分子構造を解読し、それにもとづいて治療薬が開発されるというプロセスは、この分子的身体への医学的アプローチの方法と言えよう。

この分子化が生じる契機として、ローズはとりわけ「可視化」の諸技術を重要視する。フーコーが『臨床医学の誕生』で描く解剖学における

可視化の議論を踏襲しながら、ローズはこの可視化技術が分子レベルにまで達したものと分子の身体を捉える。後述する疾患感受性遺伝子の特定や、第七章で描かれる神経化学における脳の神経伝達物質の操作可能性などは、この可視化技術の所産である。

分子化は分子生物学や生物医学の出発点である。それゆえ身体の分子化は本書の議論の核に据えられており、後述する諸変化はこの分子化と深い関連性を持っている。

## 最適化

このように分子化された身体は、最適化(optimization)という実践において医学からの介入を受けることになる。ここで言われる最適化とは、身体を最適な状態に向わせるための技術の発達、そしてそれに呼応する行政的、民間的な介入の総体を意味する。

最適化は感受性(susceptibility)と健康の増進(enhancement)という二つの局面から展開される。一方の感受性とは「病のかかりやすさ」を意味する医学用語である。そこでは身体を疾患へ導くあらゆる要素を特定し、除去しようとする試みがなされる。もちろん病原の特定は現代の医学に特有のものではないが、身体の分子化、とりわけ遺伝子構造の解明とその操作可能性によって、現代の医学における病原の特定は未来に向けられていることをローズは強調する。その具体例として、第三章ではハンチントン病<sup>ii</sup>における原因遺伝子特定の過程が挙げられている。そしてこのような、感受性を排除しようとする要求がさらに強まると、潜在的な遺伝性疾患に対するアプローチとなる。そこでは未来の疾病の可

能性を含むがゆえに、正常と病理の区分はあいまいになる。そしてすべての人間が、たとえ健康であるとされていても、実際は無症候性か発症前段階の病気であると見なされ、生物医学的な視線にさらされるのである。その結節点として、一塩基多型(SNP)が挙げられる。一塩基多型とは、ある生物種集団のゲノム塩基配列における特定の塩基の多様性のことであり、言い換えるなら種における個体の特徴を指す。この一塩基多型に見られる疾患感受性遺伝子を特定していくことが近年の生物医学における基本的なスタンスになってきているとローズは主張する。

感受性の排除が身体の否定的要素を是正していく手段ならば、健康増進は、身体を積極的に改善していく手段である。健康の増進はどんな地域や時代においても考えられてきたために、新しいというわけではない。しかしローズは、健康増進が「カスタマイズ化」へ移行していると論じる。これまでは生活習慣の改善やトレーニングによってなされていた健康の維持・増進が、錠剤の購入によって可能となる。さらには、老齢の男性の性機能を助長するバイアグラや更年期以降の女性が子どもを産むための生殖技術など、今まで不可能であった能力を獲得することができるようになる。このように我々の身体の健康は、諸々の技術によって不断の増進を続けるのである。

このような健康増進の発達において対比されるものは、自然の所与として捉えられた身体観である。このような身体観を、ローズは「懐古的なもの」として退ける。なぜなら、彼にとつてむしろ重要なのは、そこで見過ごされている精神の方だからだ。健康増進という手段は身体だけに留まることはなく、精神にまで達する。むしろ「精神の身体化」とも

言うべきものが、ここにおける最も重要な変化なのである。ローズが例として取り上げる抗鬱剤や、アルツハイマー病における記憶の喪失を緩和する記憶増強剤のような、一連の神経伝達物質の作用に関わる医薬品は、我々が精神すら自在に操作可能なものにしつつあることの最も顕著な例証となろう。精神を身体化すること、つまり精神を身体に属する脳に帰して、神経化学的アプローチによって操作可能にすること、このような契機を通じて人々は「神経化学的自己」という意識を持ち、それは倫理規範となりつつある。このような段階を踏まえ、ローズは新しい学問分野としての「神経倫理学」の可能性を示唆している。

## 主体化

身体之最適化は、それに応じて人々が主体化されていく過程でもある。フーコーは「十八世紀における健康政策」において、諸々の健康政策によって家族が医療化されることを指摘しているが、これは個人や家族が健康と衛生の規範に積極的に関わっていく主体化と捉えられる。それゆえ医学には主体化を促す役割が存在したのだが、近年の生物医学における主体化は、従来の医学における主体化とは異なっている。二〇世紀後半に新たに登場したインフォームド・コンセントの観念や、様々な疾病に対する患者支援団体の増大を通じて、ローズは「生物学的シチズンシップ」という概念を提唱する。もはや健康政策における受動的な受給者としてではなく、積極的に自己反省を繰り返し、絶えず自らの身体之最適化を試みる生物医学的主体としての人間は、社会において市民権を獲得するのである。

このような主体に対しては、どのような介入の仕方があるだろうか。ここでローズは大胆にも、フーコーが『知への意志』において捉えた「規律」と「生政治学」に次ぐ新たな介入方法として、自身が「倫理政治学 (ethopolitics)」と呼ぶものを位置づける。「規律」が個人化し規範化し、「生政治学」が集団化し社会化するなら、「倫理政治学」はよりよい自己を作るため、人間が自らを審判し自らに働きかけることによる自己技術に関わる<sup>iii</sup>。要するに倫理政治学とは、倫理的価値観に働きかけ、人間の行動を形成しようとする介入方法なのである。

## 生命力の資本化とバイオ経済

このような生命の分子化を巡る一連の動きは、生命力の資本化の動きと連動している。たとえば新薬の開発では、高価な装置の購入と優秀な人材の確保、繰り返し行われる動物実験から人間に対する治験など、長期に渡るコストを必要とする。より根本的には、開発が前提とする基礎的な生物学での研究があり、同様に多大なコストが必要となる。さらにこうして開発された新薬は、そのコストに見合った、むしろそれ以上のリターンを要求されるのであって、このリターンが新たな新薬開発の資金源となる。これら一連のプロセスを、生物医学を巡る経済、バイオ経済と呼ぶことができよう。その根底にあるのは、健康への欲望である。健康への欲望、それは前述したように際限のないものであり、これが資本主義の理念と一致する。ここにおいて、生命力は価値を帯び、資本として経済の流れに乗るのである。

この生命の価値化・資本化をより詳細に分析するためには、これより

以前の時代との対比から述べられなければならない。というのも、人間は有史以来、同様のことを他の動物に対して行ってきたからだ。ロースはこれを「生命価値 (Biovalue)」という言葉で取りまとめている。牛が乳を生産する能力、カイコが繭を生産する能力、これらを人間は捕獲し、家畜化し、人間にとって利用可能なもの、すなわち使用価値に変換する。付随して交換価値が備わる。経済は原初より生命力の経済なのであり、現代におけるゲノミクス産業や薬事産業はこの延長にすぎない。

しかしロースによると、それ以前の時代と現代を明確に区分する点は、価値化の対象が人間に向けられたことにある。近代に見られる労働力の捕獲を人間の生命力の資本化の一つと捉えるならば、労働力を構成するところの健康状態や能力などが、バイオ経済において資本主義が捕獲する価値となる。このようにして身体はバイオ経済の目的に役立つように諸部分へと分解され、それぞれが資本の波に乗って市場を成立させるのである。

終わりに

このように現代における分子生物学、生物医学を介して展開された諸変化を見てきたあとでは、本書の後書きの「分子的」身体の倫理とバイオキャピタルの精神」という題名は驚くに値しないだろう。マックス・ウエーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において描いたところの、プロテスタントの禁欲的倫理が資本主義の成立を促す過程が、現代においても起こっている。健康を至上のものとして自己健康を害するようなあらゆる要因を排除し、そのようなものとして自己

について思考する。このような倫理にもとづいて行動することによって、身体を資本とする資本主義が誕生するのである。

同時に指摘しておかなければならないことは、ロース自身も言うように、本書が生政治学の現在を分析するための地図ということである。たしかに第五章の「生物学的シチズンシップ」や第七章の「神経化学的自己」などは、まさに現在進行中の変容する人間存在について語られているために、それがどの程度の深度を持つのか、どの程度一般化・普遍化されるのかについては明確には述べられていない。だからこそ、逆に我々はこれら概念を基点にして、さらなる分析を試みなければならない。この分析は、フーコーが系譜学的に描き出した生権力や生政治学の概念を安易に現代的傾向に押しつけて解釈することへの危険性を認識しつつ、より注意深く進められなければならないだろう。

註

- i 原著は *Michel Foucault: Beyond Structuralism and Hermeneutics* (with Hubert Dreyfus, University of Chicago Press, 1983)
- ii 大脳中心部にある神経細胞が変性・脱落することにより進行性の不随意運動、認識力低下、情動障害等の症状が現れる常染色体優性遺伝病。
- iii 本書二七頁。

